

〈目的〉 合計特殊出生率の急激な減少はなお進行中であり「いじめ」や不登校も蔓延している。これらの現象は“子ども嫌い”ひいては“人間嫌い”の進行と関係しているのではないだろうか。本学会第48回大会に引き続き、これから親になる世代である青年女子の『子ども』に対するイメージの形成にかかわる要因について、自らがそこで育った家庭生活との関連について探った。今回は、家族関係の力動性について彼女たちはどのように捉えているかの視点から考察した。

〈方法〉 前回と同じである。質問紙調査法で、対象者は2年制大学の女子学生432名。調査実施時期は平成7年12月。

〈結果と考察〉 ①子どもイメージの悪い群は、父親がTVチャンネルの決定権の乏しい場合や別々の食事献立を用意する場合に多い。②子どもイメージの良い群ほど「頼りになる人」として友人・母親を、「あたたかいと感じる人」に友人・兄弟姉妹を、「厳しく指導してくれる人」に母親・友人を、「甘えられる人」に兄弟姉妹・友人を、「何でも話せる人」に友人を、多く挙げる。子どもイメージの悪い群ほど「何でも話せる人」「厳しく指導してくれる人」「甘えられる人」「頼れる人」の人数が少ない。③家族員の誰と頻繁に接するかと子どもイメージの間に関連は見いだせない。④子どもイメージの良い群ほど将来に「良い親になれる」「子どもを育てたい」「子育ては辛い仕事(ではない)」が多い。⑤これらの結果から、家族員の接触の度合いの多少よりも、兄弟姉妹間の共感性、母親の指導性、父親の意思の尊重、さらに信頼できる友人の存在などが子どもイメージの在り様と関連し、精神的孤立感の進展は良好な子どもイメージの形成や将来の親役割の受容に向けて負の要因となるおそれが示唆されるようである。